

ペシャワール会報

No. 18



あんずの花
パキスタン・ファンザ地方
(絵・山田純子)

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、
・アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

近代という迷信のなかで

中村 哲

宗教とらい

「らい」は日本でも諸外国に於ても古くから業病としてとり扱われた。近代医学の眼から見れば、これは皮膚病・末梢神経をおかす抗酸菌による感染症にすぎない。外見の容貌の変形のみをとるならば、他にも様々な皮膚・神経疾患はある。どうして「らい」のみが、ほぼ世界的に共通して差別の対象になったのだろうか。

差別と偏見は人類の発生と共にある。今らいについて思うとき、人間の差別史の根源を垣間見る気がするのである。

とはいえ、らいに対する人々の態度は時代と地域によって異なっている。また、その宗教的背景によっても関心の有様は修飾される。たとえば、キリスト教徒が一般に

本病に対して強い関心を示すのは、弱者に同情を寄せるといふイエス・キリストの教えのみではなく、新約・旧約の聖典のいたるところにその記事をみるからである。今から考えれば恐らく他の疾患も含まれていたであろうが、旧約聖書では本病を宗教的に汚れたものとみなし(ツァーラーハット)、嚴重な隔離のしきたりがあつたことが記述されている。新約聖書においては、旧来のしきたりを根本的に問い直す倫理観が貫かれ、差別される側のあらゆる階層へ暖い眼が注がれている。「らい病人の癒し」の記事はその象徴的出来事としてしばしば引用されている。世界各地で、欧米の宣教師たちがらい病治療の先駆的役割を担ったのは、決して偶然の博愛精神による着想ではないのである。

らいに対する意識

北西辺境州において、わずか数年という短いサーヴィスで私がこのようなことを強く考えさせられるようになったのは、理由がある。北西辺境州からアフガニスタンにかけては、巨大なヒンズークツシュ山脈によって住民は各地域に分断され、割拠性が著しい。その社会の発展段階と共同体意識も様々である。生活様式も山岳民と平地民、農耕民と遊牧民でまるで異なる。また各民族、各部族でも著しい差が見られる。近代化の程度も様々で、古代後期から現代までを平面的に見渡せる観がある。そしてらいに対する意識もその部族と近代化に応じて様々なのである。同一地域でも階層によって異なっている。

一般に、パキスタンでもアフガニスタンでもらいのことをジュザーム(Juzam)と呼ぶ。アフガニスタンの北東部では「ジュゾン」と呼ぶが、これは前記のペルシャ語のジュザームの訛りである。これが日本語の「癩」に相当することばと見てよい。ところが、イスラム世界ではこのジュザーム

を宗教的に忌み嫌う記述はほとんどみあたらない。従ってジュザームであるが故に偏見を持つというのはイスラム教とはほぼ無関係で、土着の伝統的な差別意識に基づくものと思われる。

地域による違い

ここで全てを記すゆとりはないが、一部の例をあげると、北西辺境州のソフトウェア地方では一般に本病に対して人々の反応は寛大であり、よほどの変形があってもよく共同体に受け容れられる。患者が困窮状態になるのは合併症による機能障害であって、決して共同体からつまはじきされる為ではない。日本においても、かつて一部の地方では治療に来る患者をよく受け容れ、住民は寛大にもてなしたといわれるが、どこかそれに似ている。このソフトウェアには、ピール・ババという有名なイスラム聖者の廟があり、お参りに来れば本病が治るといふ言い伝えで沢山の患者が集まってくるのである。もちろん、この聖者崇拜自体も正統的なイスラムとは関係なく、インドのヒンズー教や日本の神道に通ずる土着の「御利益」を求

める風習である。

逆の極端な例もある。アフガニスタンのクナール州の南部では、「ジュザーム」は恐るべき病気で、シャイターン（悪魔）の業と信ぜられている。この意識は上層の「知識層」に強く、下層農村では聞いたことがある、という程度である。彼らの話によれば、ジュザームにかかる人と肉を喰うようになるとか、昼間は山に隠れ夜になれば人里に下りてきて子供をさらうだとか、根拠のない尾ひれがついてくる。最近ペシャワール近郊のマルダンという所で、狂った母親が我が子を殺してカバブ（焼肉）にして食べるという異常な事件があったが、このような異様な精神病反応等も容易に「ジュザーム」に結びつけられて語られる可能性がある。このような地域では、ジュザームは彼ら自身の手で、「根絶計画」が行われる。親族自らが文字通り抹殺して家名を守ろうとするのである。

またチトラールの一部では、ジュザームの患者が高地の石小屋に閉じこめられていたこともあった。クナール州の一部ではまた事情が異なる。「ジュザームとは恐ろしい病気ときいてはいるが、私はまだ見たことが

ありません。このあたりにはおりません」と、あるひどい変形患者の前でその兄に言われて絶句したことがある。あるいは、ジュザームの名前は知ってはいるが、偏見もなく快く協力して貰える場合もある。

以上のように、各地域によつておそろしく対する意識が異なるので、我々の対応も様々にならざるを得ない。とくに早



なかむら・てつ 昭和21年福岡市生まれ。福岡高を経て48年九州大学医学部卒。国内の病院に勤務したあと、パキスタンでの医療活動を志し、リバールの熱帯医学校に留学、59年5月、日本キリスト教海外医療協力会（JOC）より派遣され、ペシャワール・ミッション・ホスピタルに家族を伴って赴任。ハンセン病治療を中心にすでに五年間、現地で活動している。現在八歳、四歳、一歳の三人の子供がいる。



患者さんと談笑する中村医師

期発見の場合は気をつかう。ある所は脅して服薬させねばならないし、別の所ではジュザムという言葉はさげ、「皮膚病の一種」としておし通す。こういう場所では、決して日本人の頭の中にある「らい」や、キリスト教ミッシヨンの人々の「らい病者の癒し」などという一本調子の考えを当てはめてはいけない。厳密に言えば「ハンセン病」、「癩」、「レブラ」、「ジュザム」は微妙に異なった概念で不統一のものである。(日本の

場合は、「差別語を排してなるべく科学的な用語を」ということで「ハンセン病」を使用する傾向にあるが、偏見の構造をなくすることなしに言葉のみを変えても新しい用語が新しい差別用語にやがては変わってゆくのではないかと思われる)。我々の意図は単に言葉上の操作ではなく、いかに、そこにいる患者が共同体に適応できるかを苦心することにある。らいに対する偏見がらい根絶計画によって助長されたという批判は、決して根拠のないことではない。これは、相手の立場を考慮せぬ融通性のない「啓蒙」「慈善」により生ずるものである。

「近代」による偏見

こうして、らいに対する共同体の態度を見渡してみると、少なくともアフガニスタンとパキスタン北西辺境では一定の傾向が見られるのに気づく。

第一に、有識層になる程、偏見が強い。医療関係者に甚しいのも特筆に価する。第二に、近代化以前の社会では一種の「崇り」、または「天命によるもの」と信ぜられるが、ひどい偏見はむしろ近代化に依じて強くな

ってくることである。いずれにしても、科学的知識の普及につれて差別も無慈悲なものになってゆくという奇怪な現象がみられるのである。

前近代的社会では、本病が「人にうつる」という認識がゆきわたった時に、当然嚴重な隔離の風習が生まれる。元々皮膚疾患一般が他の病気と異なってみかけのいいものではない。それに手足や顔の変形、二次感染による悪臭が加わり、本病に対する独特の観念が各社会に出来あがつてゆくものと思われる。さらにそれが「うつる」という認識は、人々に不安と恐怖心をうえつけ、患者を共同体の末端に隔離しておこうとするものらしい。

ところが、それでもなお北西辺境州及びアフガニスタンでは、ごく一部を除けば患者にも共同体内で一定の席が割り当てられている。他国の事情はよく知らぬが、少なくとも私の知る範囲で患者を残酷なやり方で追放する例はむしろ希だといえる。スワト地方にゆけば、ひどい変形患者でさえ、時には家庭内でちゃんと尊敬されて暮らしている老人もいるし、離婚されずにいる妻もある。流浪する患者でも、ピール・ババ

の廟にゆけば人々は快く施しをしてくれる。

もちろん、これは地方により、宗教指導者の考え方、美醜の感覚、生産力、等によって多少の修飾はあるが、近代日本にみられたようなむごい迫害はないと言えよう。

迫害の本格化するのとは比較的「近代化」された社会においてである。「感染」という科学的な概念が導入され、そこに精神的なものを媒介とせぬ「うつる」メカニズムが人々の頭脳に定着し始めてからである。精神科医ならば、妄想という精神病理そのものと、そこに登場する妄想内容を混同することはなからう。「崇り」におびえようと、「感染」に脅えようと被害妄想であることに変わりはない。本病に関する限り、近代の迷信の方がタチが悪かった。「崇り」の場合、人間の良心がたとい歪んだ形であっても社会的ルールの中に反映する余地がある。度をこした意地悪や美醜の感覚のみで人を断罪することに対する償いの気持ち、差別の中にも社会に一つの寛容さを備えさせられる。患者もまた、自分の病いを「アツラーの御意」として甘受する限り、我々が日本やヨーロッパの近代史の中で想像するような惨めさはないと言える。

「科学的知識」と迷信

このことは、「科学的知識」を以て治療に当たる我々のよほど心してかからねばならぬことである。下手をすると泣かずに済む子供を泣かせることになりかねない。私は本部の命ずるまま「らいは治る」という旗を掲げて仕事をすすめているが、科学以前の人々の中で、「ジューザームは感染症である」という事実のみがいたずらに恐怖心を煽り、差別迫害を無慈悲なものにしてゆくのを何よりも恐れる。

ともあれ、社会学者でもなく、らい専門医としての経験も浅い一介の医師たる私が「近代化」の功罪を論ずるのは僭越に過ぎるが、らいをこの地で見通すことを通して、一つの結論をひきだすことができる。人々の精神生活をらいを通してみる限り、「近代化」とは中世の牧歌的な迷信が別のもっともらしい科学的迷信におきかえられてゆく過程であるにすぎない。そして古い迷信の方がまだ人情味の残渣があるだけマシであった、と私はつくづく感ずるのである。近代化の恩恵は我々の日常生活の便利さと快

適さ以外に何があったのだろうか。人間の意識の中で空白となった神の座に別の目に見える偶像が居座ったといっても過言ではあるまい。

より進んだ現代社会では事はさらに悲劇的である。近代化の功罪が反省され、その恩恵も苦悩も知りすぎた者は、中世的な牧歌的迷信に回帰することもできず、次の未知の迷信を求めてさまよわざるを得ない。不信も狂言も同根である。不信の世界を脱しようとする屁理屈も、生きることの倦怠感も、異常な熱狂も、全ては神なき精神の廃棄物ともいえよう。

私はよく「ペシヤワールのような危険なところで……」と感心されたり逆に愛に思われたりする。しかし、愛憎も苦楽も悲しみも喜びも、ここでは手ごたえのしつかりした人間と神がいることを幸せに思っている。

●会員の皆様の寄稿を歓迎します

事務局では会員の皆様からの寄稿・投稿をお待ちしておりますので、ぜひお寄せ下さい。

●ペシャワール行きを前に、石松義弘さんにインタビュー

「たまたま」の出逢いから

暮れも押しつまった十二月二八日、ペシャワール会事務局で「年忘れモチつき大会」を催しました。夜も更け、四、五ウスもついた頃、多忙な勤務の合い間をぬって、はるばる大分より石松義弘さんがかけつけて下さいました。

大分市の天心堂へつぎ病院の研修医であり、ペシャワール会の事務局員でもある石松さんは、近々ペシャワールの中村医師のもとへ、かなりまとまった期間、お手伝いに行かれます。今回は、ペシャワール行きを前にした石松さんに色々とお話を伺うことにしました。

—石松さんが医者になられた動機は？

僕はもともと山が好きで、モンブランで山のガイドがしたい、と思っていたんです。小学校の頃は文学に憧がれていたんですよ。熊本の済々せいせい費ひ高校時代の山岳部の先生が非常にいい人で、冬の屋久島を目標にトレーニングも勉強も必死でやって、高二の時頂上を目前に雪のために断念したり、ということもあつただけど、その時

に思ったのは、山というのは美しくて、命がけ、人生を賭けて行くかがあるけれども、結局は自分自身のためでしかない、他の人間との関わりがないということだったんです。

「冬の屋久島」という目標が自分の中で終わり、心が揺いだ時期だったんですね。そんな時にたまたま、シュバイツァーの本を読んだんです。そうして、人との関わりのある生き方をしたい、と思つたんです。

だけど僕は欲張りだから、自分のため、なおかつ人の役に立つ生き方がしたい、という風に考えるようになって行つたんですね。「植村直己」も「シュバイツァー」もやりたい、と。

—計画的(?) 浪人

そのうち高二から三年への進級が危なく



いしまつ・よしひろ 一九五九年、熊本生まれ。熊本済々費高校を経て、国立大分医科大学入学。大学在学中特別養護施設でのボランティア、一年間のアフリカ旅行等の経験をj得て、八六年卒業。現在大分へつぎ病院で研修医として勤務、近々ペシャワールの中村医師のもとへ、医療協力に行く予定。大分市在住。

なって、あわてて高一の教科書を引張り出した。したりしたんだけど、スポーツをして、勉強をして、恋をして、高校生活三年では短い、と思いました。それで、よし、三年浪人しよう、と。

結局は二年で国立大分医科大学へ進学したんですが、そこは典型的新設校で、国家試験目的の医者の職業学校のようなもので、入学して半年で失望しました。それで、大学は知識を吸収するところと割り切って、六年の間に人間と関わるために何かしたい、と思いました。そこで友人と三人で始めたのが、特別養護施設（二、三歳から中学三年生までの孤児のための施設）でのボランティアでした。十五歳で卒園する子供達が、授業料の援助を受けるためには、公立高校合格に重要な意味があるんです。その時二十歳の自分に何ができるかというと、受験戦争で得た知識で子供達の勉強を見てやる、ということだったんです。

最初は夏休みだけやるつもりだったのが、結局アフリカに行った一年程の時期を除いて、大学在学中の七年間、ずっと続けることになったんですが、その間、本当に色々な背景を背負った子供達に出逢いました。

サラ金が原因で一家離散した子供、映画の「鬼畜」そのままの人生を見て来た子供。彼らの表面的な明るさと、追いつめられた時の暗い表情を見る度に、山に登る二十歳の自分と現実とのギャップを考えました。

結局、一番大切なのは、心を傾け、相手と通じていけるか、ということ。勉強を介してのヘルプは医療と通じるものがある、と思うんです。それは、信頼、相手の自立心の確立、こちらの「頑張り」という気持ちを伝えることだ、と。あの頃の子供たち



事務局メンバーと語る石松さん

とは今もつながりがあります。あの七年間は、こっちの方が勉強になった七年間でした。

——中村先生との出逢いは？

中村先生とは「たまたま」の出逢いでした。本当はアフリカをやりたかった僕は、一九八三年から八四年にかけて、飢饉の激しいアフリカへ行っただけです。帰りに時間が余ったら、という感じで、PIA（パキスタン航空）のカラチ経由の便でフラッと立ち寄っただけですが、中村先生のごことは、アフリカを発つ三日前にちょっと聞いただけなんです。それでカラチに着いたんだけど、暑いし、下痢はするし、このまま日本に帰っても大学の講義が残っているだけだし、で、もう少し涼しいペシャワールへ、丁度つなぎの便もよかったです、行っただけです。

ミッション・ホスピタルを訪ねて、Dr. 中村に会いたい、と言うと、外来に連れて行かれました。見るとヒゲのドクターがいるので「中村先生に逢いたいんですが。」と言うのですが、あまり上手くない英語のせいか、通じないし、彼の言っていることも

ミッション・ホスピタルの診療風景



僕には聞き取れないので、パキスタン人の医者だと思いました。それでも何とか解ってもらおうと、「ジャパン」というと、向こうが「ああ、日本人ですか。」と日本語で言っていて、やっとお互いが日本人だということがわかったんですね。

実は、そのヒゲのドクターが中村先生で、先生は、旅でヨレヨレになった僕の恰好を見てアフガン難民だと思っていたそうです。じゃあ、ということでは病院内を案内して下さったんですが、何しろ先生も多忙だったのでゆつくりと見ることはできませんでした。

「今にも死にそうな人を助けるために医者になろう」と思っている所でしたから、「ライか……」という感じはありました。

だけでも、ペシャワールの街の空白感、異質な感じというのは、僕が外国で感じた初めての驚きでした。外国からの援助に慣れ切っているアフリカに比べ、やせこけてロボロの服を着ているのにいばっている患者達がとても変わっている様に僕の眼に映りました。

その時点では、又来よう、とはまだ思わなかったんだけど、帰りに荷物をいっぱい預けられて、ペシャワール会に顔を出し、会報をもらううちに段々と、行こうかな、という気になったというのが正直なところだと思います。

この間も大学時代のボランティアをやっ

ていた施設から招待を受け、子供達の学芸会を見たんだけど「夕鶴」という劇を一生懸命演じている子供達を見てみると、こっちも胸がジーンとして涙が出て来ましたよ、と、少し恥かしそうに、うつむきがちに呟く石松さん。

彼のとつとつとした語り口の中の深い人間味にひき込まれ、話に聞き入っているうちに、いつの間にか朝の四時。もつともつと話を聞きたい、ペシャワールに行かれてからの抱負なども聞いておこなくちや、などと思いつつも寄る年波と睡魔に負けてダウン。

翌朝七時二十分。電話の音に眠い目をこすつて渋々出ると、何と声の主はさつきまでその炬達で話していた石松さん。

「今、新幹線の小倉駅です。仕事があるので、やっぱりこれから大分に帰ります。昨夜はどうも、お邪魔しました。」

インタビューの途中から薄々感じていたけど、やっぱり彼はスーパーマンだったのだ、と思いつつ、だらしなく、再び眠りに落ちていく私なのでした。

(沢)



大地で編む

絵・山田純子 文・山田純子／俊一

グルバースと赤ら髪が、柳によく似た枝を抱えて、あそこがいいかな、ここがいいかな、と裏庭を行きつ戻りつしていた。やがて、柔らかい地を見つけると、ああでもない、こうでもない、手ではかつて特に太いのを四本四角に地に刺す。それから、そのあいだに三本ずつ等分に突き立てると、枝の太い方を左手でおさえ、右手で編むように交互に横へ入れてゆく。慣れていないようで、なかなかうまく縦棒のあいだに入らない。それでもどうにか編みあげた。

大きいカライ(しよいこ)は、飼料になる落ち葉や麦わらの運搬に、小さい方は、杏やブドウ、小麦から石や人糞肥料まで、何でも運ぶ。村の生活の必需品だ。

慣れぬ仕事をたし、ほっと一息つくと、誰かがブツとおならをもらした。

「あつ、くさい！ グルバースだ」

「俺は黄色い卵を生んだんだ」

「おまえ食えよ」

陽気な笑いがひろがった。

(「ビンディ村——最後の桃源郷ファンザにいらして」 山田純子・絵 山田純子・俊一)

文——石風社

●中村哲著『ペシャワールにて——痛^らくそしてアフガン難民』を読んで

ペシャワールからの問いかけ

波平 恵美子

中村哲医師による『ペシャワール——癩^らく』としてアフガン難民』と題された本書は、ペシャワールでの診療活動の単なる報告書ではない。診療を行うに当たってのさまざまな困難な問題や事件の記述を通して、アフガン戦争、先進国と発展途上国の関係、アジアとヨーロッパ、個人と国との関係など広範囲にわたる問題について、具体的な形で論じている。そして、それらの問題の一つ一つはすべてが私たち日本に対する重い問いかけとなっている。

らい診療で養われた

鋭い洞察力

「ペシャワール会」の人々にとってはともかく、多くの日本人にとって「ペシャワール」の地名をほとんど耳にすることはないだろうし、アフガニスタンもパキスタン

も遠くてなじみの薄い国々である。ところがその国境の地での診療活動を通して、中村医師の目は日本の現状とその将来について鋭い洞察を加えているのである。そして、その鋭い目は、ペシャワールという、歴史の長い流れの中で、絶えず紛争と対立の波にもまれ、個人が生きてゆくうえでの矛盾が明確な形で現われ続けたその地で、らいを病む人々の診療に当たってきたということによって養なわれたに違いない。

さまざまな問題を提起

本書はさまざまに読み取り、そして考える資料を与えてくれるが、少なくとも次のように整理できるのではなからうか。

(1)アフガン戦争によって生じた難民をめぐる問題をはじめ、戦争がもたらす混乱と

不幸。

(2)らいを病む人々をめぐる状況。偏見、差別、病気の観念、治療の状況。

(3)いわゆる先進諸国の発展途上国への「援助」の実態、その問題点。さらに、「キリスト教的愛」が海外援助の形をとる時に出てくる問題点。

(4)医療は本質的には病む人の生活全般に係



アフガン難民のキャンプ地

わることであり、医療施設の充実のみではそれは果せない。しかし、一般の人々に困難な状況が生じる戦争中などに、病む人々は増え、医療状況は悪化する。よりよい医療は社会的平安、経済的安定と抜きがたく結びついている。

(5)しかし、日本の現状は、アフガニスタン、パキスタンに比べて極めて恵まれた状況にあるにもかかわらず、人々が「生きる」ことの実感を失い、虚無と周囲への関心に侵されている。一方経済的な繁栄は周囲の国や国民への偏見を日本人の間に育てつつある。

(6)「日本国」、「国民」、「日本語」、「日本文化」という、私たち日本人にとっては当然の観念の存在が、世界では普遍的で

はないこと、むしろ、日本の社会や文化のあり方は世界の中では特殊であること。

一氣に通読させる魅力

以上のように重い内容を持っているにもかかわらず、本書は一氣に通読させる魅力を持つている。それは、登場する人々の姿が実に生き生きと描かれていて、その姿や声さえ聞えてきそうな程であること。それらの人々が、複雑に入り組んだペシャワールのらい治療活動の内実で演じている役割が、読者によくわかるように描かれていることによるのである。読む人の職業や関心によつて、どのようにでも読むことのできる読みごたえのある本書ではあるが、現

代に生きる日本人として、中村医師の次の言葉を心の中で何度か噛みしめてみたいものである。

「アジア世界の激動のまっただ中で、日本が世界に冠たる平和国家として、相互扶助に活路を見出さざるをえない時代に我々は突入している。欧米の高級クラブの一員としてではなく、アジアで共に喜び、共に悲しむ、本格的な模索の段階にさしかかっていると言える。無論、事はそう甘くはない。机上のきれいごとでは済まされない。格調高い理念の操作ではなく、蛇のように聡く鳩のように素直に、謙虚に事実と対面し、問題に挑戦すべき時だと思われる。」

(ペシャワール会会員 九州芸術工科大学教授 文化人類学専攻)

中村哲著

四六判上製二二〇頁 一五〇〇円

ペシヤワールにて

癩らいそしてアフガン難民

●アジアの辺境から放たれた一医師の痛烈なメッセージ

数百万人のアフガン難民が流入するパキスタン・北西辺境州の州都ペシヤワールの地で、五年間に互りライと難民の治療に従事するひとり日本人医師が、金とモノ潰けにされ、羅針盤を見失った豪華客船・日本丸の乗船客である私たちに向けて放った、痛烈なメッセージ

石風社

福岡市中央区大名1-2-15
電話092(714)4838 振替福岡4-25227

現地レポート

●二度目のお手伝い

ペシャワールへ再び

事務局 松尾 栄 樹

(済生会福岡総合病院臨床検査技師)

一九八八年十月三十一日夜八時十分、再びイスラマバード空港の地を踏んだ。なつかしい。

翌日イスラマバードにある子供病院（この病院は日本の援助によって建てられた）を訪ねた。ここでは、JICA（国際協力事業団）の要請により専門家として久留米大学病院から来ている橋本技師、吉田技師に会い、院内を見学させてもらい、これからの協力をお願いした。それに、調整員の野田氏には宿を提供してもらおうなど、子供病院のスタッフには大変お世話になった。厚く感謝いたします。

検査以前の困難

ペシャワールに着くとすぐに、中村先生と、ひと月ほど先に行っている安部看護婦と、これからの仕事の打ち合わせをした。

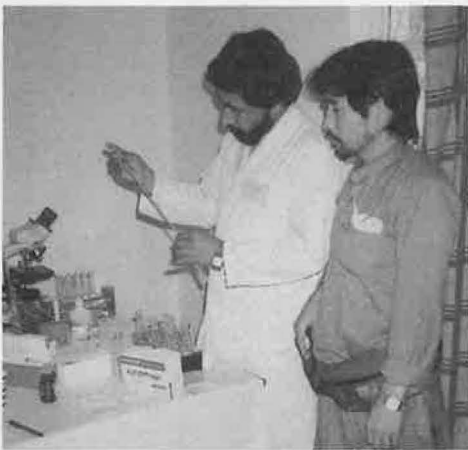
その結果、私はアフガン・レプロシー・サービス（今年からジャパン・アフガン・メディカル・サービスJAMSに変更）の検査室を手伝うことにした。まず検査器具や検査試薬のチェック及び現地調達などを調べてみた。案の定検査に必要な器具が相当数不足していたので早急に手に入れることにした。医療器具はこの国でもかなり高価だがドクター・シャワリと相談のうえ購入することにした。次に、日本から持ってきた器具や試薬（これらは日本のメーカーからの協力によって寄附して頂いたもの）の説明などを行うことにした。さて準備が一応完了し、いざテストを行おうとしてみると、日本から持ってきた機械が動かない。

中村先生が言われるにはパキスタンに持ってくるとなぜか機械がヘソを曲げるそうである。そこで、検査室のスタッフ二人と

もにイスラマバードの子供病院に行つてその機械の点検を依頼することにした。ついでに大病院の検査室がどういふものかを二人のスタッフに見学させてもらうことにした。ここでも日本の技師さん達には大変お世話になった。

スタッフとの交流、患者との再会

十一月十六日から二十日まで選挙があるということなのでホテルからの通勤が難しくなるだろう（選挙がらみの爆弾騒ぎなどである。実際に町はずれではミサイルが打ち込まれたとラジオで言っていた）とのことで、アフガンサービスに泊まり込むこと



アフガン人のスタッフに協力する松尾さん

になった。ここでの一週間はスタッフと寝食を共にし、大変楽しい思いをした。彼らも日本人と直接こんなに親しくふれ合ったことはないので、中村先生やシャワリ先生が帰られた後は毎晩夜遅くまで日本の事やアフガニスタンの事などを話したりした。

また、仕事が暇な時には車を借りてミッドジョンホスピタルに行き、安部看護婦の仕事ぶりを拝見したが、もうすっかり病棟になじんでいるのに感心した。五月に来た時に知り合った患者達とも再会でき、やはりまた来てよかったです。

うしろ髪を引かれながら

そうこうしているうちに三十日の有給休暇が終りに近づいた。シャワリ先生はしきりに私のパスポートを奪いとうとするし（シャワリ先生の迫真の演技にすっかり私はだまされてしまった）、スタッフは寂しそうな顔をして、あと何日でお前はもういないんだと言っては私を困らせた。しかし、私にはどうしようもできない。私は複雑な気持ちでペシャワールを後にした。

*

今回のペシャワール行きに際しての多く

の方々の御援助や御協力に心から感謝いたします。また、ペシャワールにおいては中村先生、シャワリ先生、スタッフの方々に

付・中村先生からの手紙（抜粋）

松尾君は二週間以上にもわたって、検査室の改善をして行かれました。折りもよく、アフガン・チームの再編成と新しいプログラムの開始にあたって検査室の充実を企てていた時だったので、一同大変な喜び様でした。

小生は、たいしたもてなしは出来ませんでした。職場での困難を乗り切ってはるばるペシャワール会員として助つた人においで下さったことに心強く思いました。お陰で、肝機能その他の基本的

はたいへん親切にしていたいただき心より感謝いたします。今度は彼らの故郷であるアフガニスタンを訪問できたらと思っております。

な検査設備は充実し、チームの一同、大いに励まされました。

最後の日に、松尾君が深刻な顔をして家にやって来ました。「強制的にパスポートを取られて、滞在を延期させられそう。先生とチームの連絡がうまくいってないので……」ということでした。我々としては冗談で彼を不安に陥れただけですが、少しきつすぎたようです。無礼はご勘弁願います。ともかく、それだけ皆期待しているということですから。これに懲りずに、またお願い致します。改めて松尾君に心から感謝いたします。

●安部さんから事務局への手紙●

ペシャワール会の皆様お元気ですか
私はつつがなく日々を過しています。
日、月と2日間お休み(休日)がありますので充分身体の方も休養がとれます。女性という事もあり一人でオールドバザールに行くのは危険という事で充分には楽しめませんが近くのバザールに一人で買い物にも出かける事が出来るようになりました。選挙の方も無事終了しましたが、今後も予断を許さない状況である事はまちがいなさそうです。

松尾さんも十二分に能力を発揮され、彼自身、アフガンのスタッフ同様に満足のいくものだったようです。私の相手も程々で指導に当たっていらしたようです。先生も大変喜んでいらっしゃいました。みなさんのなかで「何かお手伝いができるのではないか」とお思いの方はぜひ一度いらして下さい、歓迎します。

私自身ペシャワールの氷山の一角しか見ていないのですがそれでも刺激は沢山あります。ムラム街へも行ってみたいと思うのですがなかなか一人では行けそうもありません。

もうすぐ忘年会シーズンになりますね、どうぞ皆様、御身体をくれぐれも大切に下さいませ、ではお元気で。

安部美智子

昭和63年11月22日(火)

現地レポート

●血球計算器を携えて

現地の立場に立った技術協力を

宮原 昇

(臨床検査技師・コマック検査センター勤務)

去る一九八七年三月三十一日から四月十一日まで、宮原昇技師（コマック検査センター勤務）が、血球計算器（CC-110）をミッション・ホスピタルへ持って行き、現地技師への技術協力を行いました。これは、中村哲先生を支援するために、福岡県臨床衛生検査技師会北九州支部から派遣されたものでした。その時の様子と、昨年、中村先生が一時帰国された際宮原技師との再会が実現しましたので、宮原技師の心境をあわせてご紹介します。

●ミッション・ホスピタルの現状

ペシャワール、午後0時、無事到着。初めて見るペシャワールの風景、気温22℃日本の初夏を思わせる気候。街中は、人力車・馬車・日本製の車などが道路狭しと通っており、ビルには、日本でもみかける看板が掲げてあり、実に不思議な光景でした。

今回、私が血球計算器を持って行ったミッション・ホスピタルは、約二〇〇床の規模でペシャワールでは、大きな病院の一つ

でした。現地の医療水準は低く、日本の二十〜三十年ぐらい前のレベルだと思えました。目の病気が大変多く、らい疾患も多数存在していました。又、栄養障害からくる貧血や、寄生虫などの感染による貧血の患者が多数いるかと思えば、糖尿病の患者もいて、生活水準の差が病気格差まで引き起こしている状態でした。

検査のレベルも予想以上に低く、主な検査といえば、血色素量・白血球数・白血球分類・尿・便の一般検査ぐらいでした。検

査室には、機械らしいものがまったくなく、機械といえば今回持って行った血球計算器と中国製の遠心機ぐらいでした。すべての検査は、昔ながらの方法でやっております、今までは赤血球数の検査をやっております、血球計算器が導入され、やっと赤血球もカウントするという状態でした。

しかし、検査レベルの低さという事よりも私が一番驚かされた事は、衛生状態の悪さでした。採血する際、私たちは普通、殺菌されたシリنجや注射針を用い皮膚を消毒して行いますが、現地では、実に悲惨なものでした。使い古したディスプレイのシリンジや注射針を水道水で洗い、シリンジは机の上で乾燥させ、注射針は、消毒液らしいものに浸け、皮膚も、ほとんど消毒もせずに採血していました。又、輸血も同様で、日本の約四倍ものH_{BS}抗原陽性率があるにもかかわらず、B型肝炎に関する検査も行われず、血液型の一致のみで全血輸血するという、実に恐ろしい状態でした。

今回、血球計算器の設置・操作方法を指導するため、ペシャワールへ行ったのですが、現地のこの様な状態を検査技師として、いや一人の人間として、少しでも改善しな



日本からおくられた薬品類

ければならないと思ひ、ミツシヨン・ホスピタルの技師に色々と指導しましたが、ほとんど理解してもらえず苦勞しました。これは、彼らの基礎的知識が乏しいため理解できなかった部分があつたためでしょう。しかし、帰国する頃には、注射針を浸ける消毒液だけは、毎日交換するようになり、少しの進歩がありました。この事は少しの進歩ではなく大きな進歩なのかも知れません。衛生環境が大きく異なる現地では、日本と同じ感覚を固守しては、だめなのかも知れません。

この様な環境のなかで私は十日間の日程を終え、現地技師へ、パキスタンの技師と

日本の技師は、友情で結ばれています。頑張つて下さい」とメッセージを伝えペシャワールをあとにしました。

今回の技師派遣で、ペシャワールの人々と共に生活し、彼らは、私に、決して教科書通りには事が運ばない事、柔軟な思考力でその地域に適した策を練り、現地の人々と力を合わせて問題を一緒に考え、改善の手助けをする事、豊かな国日本が援助という形で送る物資が、現地の人々の生活のリズムを乱し、悲惨な状態にしている事、など多くのことを教えてくれました。

その後のペシャワール これからの援助とは

ペシャワールのミツシヨン・ホスピタルへ血球計算器(CC-110)を持っていつてから一年余りたち、はたして現地の医療活動に役立っているだろうか。機器を使いこなす事が出来なくて、ほこりをかぶっているのでは……でたらめなデータを出して、医療活動を混乱させているのではなからうか……？ 又、今回の技術協力が、保険診療のない現地で検査が増え、貧富の差をつくっているのではないだろうか、と

言う不安の時を過ごしております。

去る七月九日博多にて、一時帰国された医師中村哲先生とお会いして現在の状況を伺う事が出来ました。私が持っていた血球計算器は若干、赤血球数が低値で出ている様だが、医療活動に役立っていると言う事でした。

技術協力という言葉からは、多くの機器類を持ちこみ、物質文明の開発にのみ協力するといった光景がイメージされがちです。しかし、これらの機器を使いこなさず、医療活動に役立てていくのは、ほかならぬ現地の人々、特に現地の検査技師なのです。

現地、中村哲先生を中心に行われている医療活動が、現地の人達自身の手で今後引き継がれていかなければ、医療の進歩、又先生の活動が無意味なものになってしまいます。私が、血球計算器を持ち込み操作を説明し、現地技師がどうか使いこなさず、医療活動に役立っているという事は、大変意義あるものだったと思ひます。

今後は、資金・技術協力とともに人材の養成をめざした協力が必要だと思ひました。

事務局だより

※新しい年、新しい時代となりました。私達ペシャワール会事務局も、それにちなんだ訳ではありませんが、新しい作業場へと移転することとなりました。場所は勿論、大名一丁目、今までの作業場のすぐ近所です。なぜか、この大名の雰囲気がとても気に入って、ここを離れる気がおこりません。新しい作業場も、FARA・HOUSEとして、福岡留学生会や、英・中・韓・仏語などの学習グループと協同で事務所を維持し、協力し合っていくつもりです。会員の皆様、水曜日の夜は作業やミーティングをしていますから是非顔を出して下さい。(FARA・HOUSEではペシャワール会会員を中心に語学の勉強もやっておりますので、参加ご希望の方はご連絡下さい。)

※次にこの十八号が遅れたことについて、おわびを申し上げます。もうすでに年末募金としていただいた方も大勢おられますが、この号の中に年末募金ならぬ、新年募金の御協力の振り込み用紙を同封させていただきます。入れ違いとなられた方には申し訳ありませんが、御諒承下さい。募金いただいた方にお礼申し上げますと同時に、お願いを申し上げます。※中村先生のパキスタン滞在も五年をすぎ、かなりの面で軌道に乗っていますが、最終的には、現地の人材の育成が一番の大きな課題であり、必要とされることです。前回十七号でもお伝えしたように、中村先生が今一番、必要を痛感し、また力を入れてのことです。この新年募金は、その人材育成に使用させていただきたいと考えております。

※さらに、指定寄付がなされたことについて御報告いたします。ソロプチミスト北九州・北九州西・福岡・福岡東の推薦により、ソロプチミストの方から、脳波計を寄贈いただきました。これは中村先生が、精神科の講義をもっている、ペシャワール大学医学部に贈られます。今後のかの地の医学向上に大きく役立つと信じるとともに、厚く御礼を申し上げます。又、鶴城ライオンズクラブからは、昨年の寄贈に続き、今年は高温高圧滅菌器を寄贈いただきました。中村先生の永年の希望でもありましたので、大きな効果があがると思われまます。ありがとうございます。さらに、西南学院においては、学院全体の取り組みとして協力をいただいております。私達事務局としても、非常に心強い思いです。

※さらに、昨秋事務局の松尾臨床技師がペシャワールに手伝いに行く際には、さまざまな薬品会社等関係者からのご協力もいただきました。併せて感謝いたします。

※刊行が遅れましたが、中村先生の本「ペシャワールにて——癩そしてアフガン難民」(石風社 定価一、五〇〇円)が出版されました。ペシャワールの現状はもちろん、日本の置かれた状況がビビッドに描かれたすぐれた本です。会員の皆さまにはぜひ読んでいただきたいのですが、友人、知人の方々にもぜひおすすめていただき中村先生の活動を知っていただければと思います。この本は会でも積極的に扱っていきますので、ご注文下さい。

【作業場 中央区大名一〇一〇二五 上村第二ビル三〇七号 ☎(〇九二)七三一一三三二二】

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、JOC Sの「共に生きる」という理想に賛同し、中村哲医師のパキスタン北西辺境州での医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、派遣母体であるJOC Sを通して必要な協力を行うが、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑤ 会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 役員は改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局を福岡YMCA (〒八一〇福岡市中央区天神一丁目10の24 福岡三和ビル4F ☎七七八一七四一〇) 内におく。